

## 中国における民主化と民族問題をめぐるジレンマ

王力雄『私の西域、君の東トルキスタン』を読む—新疆のパレスチナ化への警鐘—

劉燕子

1. 新疆—シルクロードの浪漫と剣戟
2. 新疆ウイグル自治区とウイグル人
3. 新疆ウイグルの歴史
4. 湖南省のウイグル人
5. 湖南から新疆に渡った辺境守備開拓団女性兵士
6. 現代の新疆ウイグル—「開発」と「援助」—
7. 王力雄—独立精神のある知識人
8. 王力雄の言論活動
9. 新疆ウイグル問題への取り組み  
—「七・五」流血事件に先がけて警鐘を鳴らした知識人—
10. おわりに—「誰がために鐘は鳴る」—

このように考えながら、私は「七・五事件」一周年に際し、ジョン・ダンの詩の一節「人はみな一島嶼（とうしょ）にてはあらず。人はみな大陸（くが）の一塊（ひとくれ）。…故に問うなかれ、誰がために鐘は鳴るか。それは汝がために鳴るなれば」を想起した。これは、ヘミングウェイの『誰がために鐘は鳴る』で引用されている。スペイン内戦の時、これを対岸の火事として傍観せず、自ら戦地に赴いた知識人たちは何人もおり、ヘミングウェイはその一人であった。この「誰がために鐘は鳴る」は、今日、日本人にも問われているのではないだろうか。

参考：『私の西域、君の東トルキスタン』日本語版序文

王力雄「日本の読者へ」

劉燕子訳

拙著を書きあげるまで九年間もかかり、ようやく二〇〇七年に台湾で出版することができた。私はこの本で新疆がはらんでいる危険性を指摘した。

二〇〇九年に起きたウルムチ事件では、ウイグル人と漢人の双方が恨みを抱いて殺しあい、評論家は口をそろえて拙著の予測は裏づけられたと言ったが、私が憂慮するところは遙かに遠く、また大きい。私から見れば、ウルムチ事件は単なる端緒にすぎない。現在のところ、新疆の情勢は落ち着きを見せているが、これはただ弾圧によるもので、矛盾は解決されず、怨恨はむしろ強まり、そのエネルギーは蓄積し続け、将来爆発するときにはさらに激烈になるだろう。

爆発は将来いつ起きるのだろうか？ そこには背反しあう問題がある。中国の民族問題は専制政治の悪い結果だが、専制政治の下で全面的な爆発が抑えられている。それは専制政治が爆発を全面的に広げる連鎖を断ち切ることができ、爆発を局部で初期に消火できるからである。従って、専制政治が崩壊し、社会が民主化に転換し始めるときこそ、専制政治的な鎮圧ができずに、社会的連鎖が貫通し、全面的な爆発が起きる可能性が最も高くなる。

このことについて我々は十二分に注意しなければならない。――民族問題の解決は、政府側の政策の変化だけでも、また民主主義が到来して自然に解決されることを静かに待つだけでも不可能である。民族の怨恨が解消され、人民に和平が実現されなければ、たとえ政権が交代しても、たとえ民主主義が到来しても、民間では依然として敵対関係が続き、内戦や虐殺の可能性は存在し続ける。

専制政治は民族の怨恨をもたらし、その反面、これを民主化を拒む理由に使い、蠱惑的な大漢民族主義で国民の支持を得る。このような誘拐犯と人質の共生共死のロジックこそ、中国が民主化に向かうために解きほぐさなければならない難問である。

このジレンマはいかにして乗り越えられるか？ 私見では、民間において民族間の対話を促進することから始めるのが重要であると考え。各民族の人民の抱く怨恨を解きほぐし、相互に理解しあい、暴力を拒絶するときこそ、専制権力は国家の分裂を理由に民主化を拒む理由として利用できず、将来、中国が民主主義へ順調に転換ことを可能にするだろう。

私が拙著を書いたことも、民間の対話の一つの試みである。拙著が日本で読まれることは、民間の対話にとって有益である。なぜなら、専制政治の統治下で民族間の対話は自由でも十分でもなく、自由な社会を経由して対話ができるルートが開通することは重要だからである。拙著に関心をもって読まれる日本の読者に感謝する。さらに中国の民主化と民族の和解のプロセスにも関心を寄せていただくことを心から念願する。

馬場裕之氏のすばらしい翻訳に感謝する。拙著を出版する集広舎の川端幸夫氏に感謝する。さらに私の友人の劉燕子女史に特に感謝する。彼女はいち早く拙著を日本に紹介し、その後もたゆまず拙著を日本社会で提起し続けただけでなく、校正、監修、解説を担当して最後まで日本語版出版に尽力してくれた。

王力雄

二〇一〇年五月二日

## チベット・ウイグル族VS.中国政府

# 「民族問題 政治改革の鍵」

ワンリ・シュン 王力雄氏に聞く



1953年、中国吉林省生まれ。78年、知識人らが壁新聞で民主化を求めた「民主の壁」運動に参加。80年代以降、作家活動を続ける一方、チベット族居住地域を幅広く踏破。99年にはウイグル族に対する民族政策の現地調査に入り、逮捕された。妻はチベット人作家のツェリン・オーセル氏。

中国で大多数を占める漢民族でありながら、少数民族のチベット族やウイグル族に理解を示し、政府の民族政策に異を唱えてきた作家の王力雄氏が朝日新聞のインタビューに応じた。

—2008年のチベット自治区、09年の新疆ウイグル自治区の大規模騒乱は当局が抑え込んだが、最近も四川省でチベット僧の焼身自殺を機に緊張が高まっています。

相次ぐ騒乱と弾圧で政府とチベット族、ウイグル族の関係は、元に戻れない対立関係に変わった。当局への怒りは少数民族の胸に深く刻み込まれている。中国政府は経済成長の恩恵を与えることで解決を図ろうとしているが、誤りだ。民族問題は単に経済の問題ではない。文化、宗教、言語を含む繊細な問題であり、互いの理解と尊重が必要だ。

—中国政府が強硬に少

数民族を抑え込もうとするのはなぜですか。

今の中国は（植民地化された時代を経て）国家統一を最優先課題に成立した歴史的背景があり、民族独立や分裂につながる動きを許すことができない。（漢民族が大半の）民衆の側も同じで、みな「独立反対」と騒ぐだけだ。少数民族の立場を深く、静かに考えられる人がいない。

—あなた自身は各民族

の独立を支持しますか。

理論的には、それぞれ状況の異なる自治区や省は独立するのがふさわしいと考えるが、現実として今の国家のあり方を変えるのは難しい。独立は手段に過ぎず、目的は人々の幸福な生活だ。必ず独立という道を通らなければならないとは限らない。対話と尊重を基本とした共存のあり方を探る必要がある。

—民族問題に深くかか

わるようになった理由は。

84年にチベット族の春らしや文化に触れたのが原体験。その後、中国の（民主化に向けた）政治制度の改革を考える中で、最初の関門は民族問題だと思いついた。民族独立の要求が高まれば、政府は「国家分裂の危機」を叫んで体制の維持を図る。民族の衝突をどう回避するかが、政治改革の重要な鍵になる。

（聞き手・林望）

## 著者に聞く



訪日が東日本大震災と重なり「お互いに信じ合い、助け合っているのを実感した。残念ながら中国社会にはこのような信頼感がない」と話す王力雄さん＝東京・高田馬場

# 対話こそ解決の糸口

「民族問題は表向きは沈静化しているが、矛盾は深まっており、いつか激烈な形で爆発する恐れがある」。長年、中国の少数民族問題に関する著作を発表してきた作家の王力雄さんは警告する。

このほど訳された本書は2009年、台湾で出版。漢民族中心の経済発展に取り残され、宗教や文化を否定されるウイグル社会を導く取組した「ウイグルシミン」だ。不満が爆発を自覚するウイグルに、ひとつの可能性を指摘し、中国国内

王 力雄さん

おう・りきゆう 1953年  
中国吉林省生まれ、作家。  
著書に「黄禍」「ダライ・ラマ」との対話」など。

## 私の西域、君の東トルキスタン

でも注目された。その予言は現実化し、09年7月にはウイグルで大暴動が起きた。

「執筆のきっかけは、私が逮捕されたことでした。この問題に本格的に取り組み始めた1999年、新疆ウイグル自治区を取締旅行中、国家機密窃取の疑いで4日間拘束された。その時に知り合ったのが政治犯として投獄されたウイグル青年のウタルだった。

「それまでは、漢民族の目線と問題をとらえていた。同じ囚人と

してウタルと意識投合し、彼の本当の考えを知ることができた」。釈放後、4度にもわたってウタルに潜入。ウタルらとともに漢民族は入ることの難しいウイグル社会をくまなく回り、現地の人々の声を集めた。

ウイグル人を追い出し、政府の役人らが利益を独占する都市開発、学校での漢語教育の強制、地元に利益をもたらさない天然ガスなどの資源の収奪…。本書が暴露する現状だ。「ウイグル人の知識人が『もはや漢民族との共存は不可能』と語るほど、人々の怒りや絶望は強い。しかもその不満を述べることを許されていないのです」。

中国政府は経済発展を著しく、巨額の治安維持費を投じてきた。また矛盾を抑え込み、表向きの平穏を保ちようとしている。「しかし、経済が下降に向かった時に矛盾が表面化し、民族問題はハスチチのように解決困難な状況に発展するかもしれない」と警告する。

解決の唯一の糸口は、本書で示したような「民間の対話」による相互理解だと言う。王さんは昨年、インターネットでダライ・ラマ14世と中国の市民との対話を実現して大きな反響を呼んだ。「対話の枠組みを広げる必要がある」と力説する。

(「私の西域、君の東トルキスタン」は鹿嶋裕子訳、集広舎・3480円)

## 神選

- (3～9日)
- ①長谷部誠「心を整える。」(幻冬舎・1365)
- ②「ABC Cooking Studioの今すぐ食べたい基本のおかず」(主婦と生活社・980)
- ③岩崎夏海「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」(ダイヤモンド社・1680)
- ④有川浩「県庁おもてなし課」(角川書店・1680)
- ⑤竹田恒泰「日本はなぜ世界でいちばん人気があるのか」(PHP研究所・756)
- ⑥池上彰「伝える力」(PHP研究所・840)
- ⑦尾田栄一郎「ワンピース ストロング・ワース⑤」(集英社・798)
- ⑧広瀬隆「原子炉時限爆弾」(ダイヤモンド社・1575)
- ⑨池上彰「知らない恥をかく世界の大問題②」(角川マーケティング・819)
- ⑩川北義則「20代でやっておきたいこと」(三笠書房・1260)
- (ジュエック堂書店三管店調べ、単位円)

ペーパーセラー

2011.4.8

# まんとようばんが

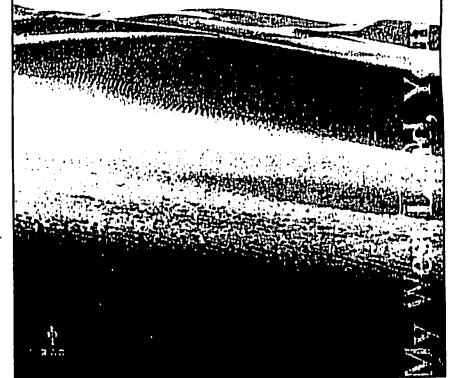
## ウイグル人との平和的共存を 模索する中国知識人の冒険

麻生晴一郎

あそつ せいいちろう / フリーライター

### 私の西域、君の東トルキスタン

王力雄 著  
馬場裕之 訳  
劉燕子 監修・解説  
集広舎



【私の西域、君の東トルキスタン】

王力雄＝著 馬場裕之＝訳 劉燕子＝監修・解説 集広舎  
3486円 ISBN978-4-904213-11-7

## 中

国には民主派、親政府派など多様な意見を持つ知識人がいる。だが、そうした多様性も民族問題になると別だ。日ごろ民主化を唱えて政府に批判的な人でもウイグルの独立問題になると途端に政府を弁護しがちで、少数民族の側に身を置いた意見はきわめて少ない。中華民族としての独特な統一意識やナショナリズムのためと思われ、同じ傾向は台湾の独立問題に関しても言える。

しかし、本書の著者は例外だ。チベット人など少数民族の独立問題について、フィールドワークを重ねつつ相手の立場に立って平和的共存の道を探ってきた。本書は一九九九年から二〇〇六年にかけて著者が新疆ウイグル

ル自治区を訪ねた五回の旅を基に書かれている。最初の旅は秘密文書の入手が目的だったが、あつけない警察に捕まり、拘留所生活を送る。本格的な取材旅行が始まるのはそこからで、拘留所で著者は本書の主人公となるウイグル人の青年ムフタルと知り合う。以後、ムフタルや彼を通じて知り合った大勢のウイグル人と交流を重ねる。漢民族に憎悪の感情を持つ人も多いウイグル人と打ち解けるのは容易でなく、拘留所体験があったからこそ可能であった。

かくして漢民族の移民や、安定を名目に宗教・民族への弾圧・漢化政策が強化される中、ウイグル人の困窮ぶりや漢民族への憎悪が、限りなくウイグル

人の側に立った視点で描かれている。本書が書かれたのはウイグル人と漢民族の衝突が表面化した〇九年よりかなり前であるが、民族間の対立・憎悪が激化し、テロ活動が起ころうと正確に指摘しえたのは、草の根の取材からにはかならない。

著者はムフタルとの対話を通じて多民族が共存できる道を模索していく。ムフタルは国家安全危害罪で捕まった民族主義者であるが、必ずしも独立にこだわらないと話すなど、穏健な面もある。ウイグル人の中にはより強硬に独立を主張する人や中国政府寄りの人もいて、立場によつて考え方や事実認識は異なるはずで、ムフタルの認識でどこまでウイグル全体を代表でき

るかとの疑問は当然起きてくるだろう。しかし、本書は漢民族がウイグル人に対していかに真摯に向き合うかの軌跡を示した本と言うべきで、客観的にウイグル事情を解説する地域研究書の類とはおのずと異なり、むしろムフタルに親しみ、彼を糸口にウイグル問題に切り込んでいったことの意味を読み取るべきであろう。

漢民族の移住や経済開発が進む中で、ウイグル人にとっては伝統文化に加えて生活の安定も損なわれていることが本書からわかる。ムフタルのような本来は穏健な民族主義者が反政府色を強めるのも安定が奪われる危機感からである。中国政府が民族主義活動を取り締まり、宗教

への規制を強化するのは安定の爲として、安定と独立がさも対立する概念であるかのように論じられることがあるが、ウイグル人にとってみれば安定と独立は対立せず、独立できない中で安定が脅かされているのである。安定という大義名分が政府の都合のために働くこと。中国の政治についても安定と民主化の二元構造で語られることがある。

だが、近年の政府批判を含む市民社会的な動きが地震・食中毒など生活の安定が脅かされる中で育ってきたように、「民主化か安定か」との対立軸も見直すべき時に来ている。「中国の政治改革の最も重要なチャレンジが民族問題」と書く本書は中国の体制そのものをも問うているのだ。

# チベット人に犯した

## 「永劫の犯罪＝革命」の記録

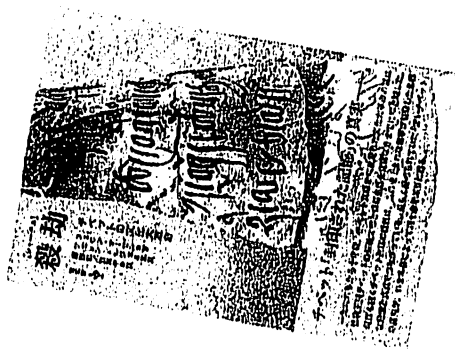
チベットは中国にとって、「二重の不都合の問題」である

楊海英

ツェリン・オーセル 著  
ツェリン・ドルジェ 写真  
藤野 彰／劉燕子 訳

### 殺劫

チベットの文化大革命  
10・18刊 A5 3410頁 本体4600円  
発行＝栗広舎／発売＝中経書店 (E092・271・3767)



#### 忘却に抵抗する映像と記憶

一人のチベット人、チベット自治区の書記官、チベット自治区の副司令官ツェリン・ドルジェが1991年に亡くなった。娘のオーセルは父親の写真を整理したところ、数枚の写真を発見した。チベット仏教の僧侶とチベット神道の僧侶、チベット民族の偉大な領袖毛沢東を賛賞し、その偉大な偉業をたたえ、チベット自治区で吹奏された「プロレタリア文化大革命」を擁護した記録であることがわかった。娘はその写真を見る。中国人(漢族)の反体制派家に見せた。中国人でありながらもチベットの歴史を重視的に中国とは距離を置いて捉え、かつチベットの今後の運命についてもチベット人の視点で捉えようとする主力軍である。その写真には中国共産党が躍進によって排撃しつつあるチベット民族の記憶であり、政府が期待する「忘却」に抵抗する資料群である。主力軍は彼女に伝える。つまり写真家の娘は父親の力を引き継ぎようとする人物たちに

「20世紀の世に影響を及ぼした10大歴史的出来事」の一つ、中国文化大革命が選ばれたことがある。しかし、文化大革命が国内の少数民族地域でもどのように繰り返されたかについての研究はほとんど空白のまま今日に至る。

#### ●二重の裏切り、心的外傷に喘ぐチベット人

仏教がチベット人の生活、文化の根幹を成している。チベット人の歴史でも、暴力を極端に忌む文化として「善の国」の民は善良を主眼とする。しかし、写真家では、チベット人の青年たちが熱い情熱を持って革命を擁護している。陣亡した英雄の肖像を巨額で買い取った「善の国」を捨てて、僧侶として生活している。紙製の「善の国」は中国共産党の人間を処刑する権を擁護する時の写真であり、かの毛沢東も文革時代に拉致された僧侶の肖像を人々を殺害するのには活用したことがある。漢族社会の勢力がさらに「革命」ともなるとチベット人の間に伝わっている証拠である。取り壊された寺院の頂上には新たに毛沢東の肖像が飾られて、「神の国を築く」が完成する。中国共産党が創出した「解放者たる毛沢東」がチベット仏教を完全に葬り、名義共に「麻薬な宗教」を否定した結果を伝えている。

叩き上げられ、暴力を受けているチベット人には過去に中国人民解放軍のチベット侵略に協力した人物や共産党の支配に賛同した人々が多いた。一度は自民派を裏切った彼らは「過激の功績」が認められて、中国にとって無用の長物とされた。そして、証言によると、中国の急回車にチベット人を捕らえた青年たちも文化大革命の終りにその「革命的義勇」はともに関心は無視されたという。それ

だけでなく、自民の急回車に捕らえられた青年たちは「母なる民族と宗教に対する背信行為」を反省しようとして信を断ち、逃れに出かけたり、隠匿に専念したりするようになった生き方が描かれている。「チベットの革命はチベット人の手」だ、という諷刺の言葉に漢族の中国政府は成功しているが、「二重の裏切り者の国」を抱えたチベット人社会はその苦しみの中に閉じている。現実のチベットに閉じている現実が、ここに現れている。「善の国」を捨てたチベット人、漢族の現代版である。私は真に同じ少数民族であるモンゴル人の自治区について調査してきた。西自治区の文化大革命の裏面を比較してみると、明瞭な裏面が現れる。モンゴルでは尊厳から中国人をモンゴル人を尊厳の対立とし、その道の現実、即ちモンゴル人が中国人を殺害することはありえなかった。一方のチベット人が展開されていくモンゴルは、運命は「修正主義国家」と国境を接し、いわば「修正主義」からの侵略を防ぐ前哨基地だったから、自治区全体が軍事管轄下におかれ、殺害が許された(拙著『隠された革命』上、09年12月刊・岩波書店)。モンゴルと異なると、中国政府は金銭を持ってチベット人に接し、チベット社会に内紛を起し、傍観する余力があったという印象を受ける。モンゴル人は精神な漢族で、チベット人は「戦勝を嫌う」教徒だから、このイメージも中国人側におつたかもしれない。

#### ●多重の罰印は解かれず

「西蔵民族に対して暴行を加えて民族を解放した」と中国人共産主義者たちは喝を張る。しかし、中国人が少数民族に対しては西蔵民族以上に強硬な政策を繰り返して

植民地支配体制を続けている。事実には目をみまわす。「対西蔵民族の戦いは正義」「対中国人採取」の闘争は「祖国の分岐を定めた戦い」だとして、チベット人やチベット人、そしてモンゴル人の近代の民族自決の歴史を極力否定する。このダブルスタンダードに中国の民族問題の本質がある。

チベットは中国にとって「二重の不都合の問題」である。と本邦の向き手たちは主張する。チベット問題は人権問題と民族問題、そして国際問題の複合体であるとも語る。この複合体の起爆剤の一つに過去の文化大革命がある。「文化大革命は民族や地域に関係なく、全国民に押し付けられた」と中国政府も認める。しかし、少数民族地域で発生した破壊や殺害は例外なく漢族社会の勢力の伝播や周辺に伝わった結果である。言い換えればチベットがもつ中国の歴史をなれなかった、絶対的でありながら現実である。「漢族も殺害」だとする言説は、中国人が少数民族に対して犯してきた戦争を隠蔽する等の詭弁に過ぎない。民族問題をめぐる中国の歴史は複雑なものである。過去の文化大革命をちゃんと清算せねばならない、と訴えたものの足跡は消えている。

2009年2月から4月にかけて、北京で「チベット民主改革50周年記念展」が開かれた。文化大革命期の事柄については触れないところが、逆に「立ち上がった五蔵だ」は許されなかった」という言説で飾った。あからさまに過去の侵略と犯罪を擁護する姿勢を見ると、文化大革命の経緯を歪曲してチベット人や少数民族に対して有効に使用されている事実が世界に現れられたのである。

(静岡大学教員／文化人類学・モンゴル研究)

2006年(平成18年)5月4日(木曜日)

言説

書

## 戦時中、飢餓住民に食糧

## 日本軍中国民救う

【北京＝藤野彰】日中戦争さなかの1942年、大千ばつに見舞われた河南省の人々を救ったのは、なんと日本軍だった。そんな史実を描いた、中国人作家のルポルタージュが日本語に翻訳され、注目を集めている。主題は日本軍の「美談」ではなく、人間の「生きる」という営為は政治や戦争の善悪を超えということ。人々の生活こそが歴史を作るとの作者の主張は、政治対立に翻弄される日中関係に新たな視点を提供している。

## 「政治より人」訴え 中国ルポ出版 邦訳

表した「温故一九四二（1942年を訪ねる）」。邦訳はこのほど竹内実監修・劉燕子訳で中国書店から刊行された。

1942年、河南省など華北一帯は激しい干ばつに襲われ、同省では約300万人が餓死。同省の農村出身の劉氏は郷里を取材して歩き、資料を調査して、当時の飢餓地獄の惨状をルポルタージュにまとめた。

作品が異色なのは、飢餓した人々を助けたのは国民党政府ではなく、「侵略者」である日本軍が放出した軍糧だった、という史実を明らかにし、「敵の食糧」を食べて生き延びた人々の選択を肯定した点。中国では日本軍は「絶対的な悪」であり、国民は売国奴であつてはならないとの認識が強いため、作品は批判も含めて論争を引き起こした。

そんな国内事情を承知しつつも、劉氏があえてノンフィクションの形で作品を世に問うたのは、「人々にとって政治とか戦争とかは小問題であり、『食べる』ことこそが大問題だ」という根源的な真理を訴えたかったからだ。

劉氏は「中国人と日本人の間には問題などない。政治は小問題であり、いずれ過ぎ去っていく」と語り、「政治よりも人」との巨視的観点から関係をとらえ直す必要性を訴えている。

